

メッセージアウトライン 創世記4:17～26「カインのその後」

[17]「カインはその妻を知った。彼女はみごもり、エノクを産んだ。カインは町を建てていたので、自分の子の名にちなんで、その町にエノクという名をつけた」

カインの妻とは誰か。どこから来たのか。この質問に対する答えは、カインはアダムの娘と結婚したということである。アダムとエバの子はカインとアベルだけではない。創世記5:4節によれば「アダムはセツを生んで後、八百年生き、息子、娘たちを生んだ」と書かれている。当時の世界は創世記7～8章に書かれているノアの洪水以前の時代で「大空の上の水（広大な水蒸気の層）」が上空にあり、それが地球のすべての表面をおおい、高気圧と温室効果をもたらし、どこも一様に暖かい気候であり、突然変異をもたらす宇宙からの有害な放射線は大空の上の水によってさえぎられ、そのため、すべての生物は現代よりもはるかに長く生きることができたであろう。人間も当然子を産める期間も長く、多くの子どもが生まれたことであろう。そのような環境の中で生まれたアダムとエバの子どものひとりがカインの妻となったのである。このような時代には近親結婚によって遺伝学上の障害をもたらすこともなかった。

4:16では「カインは、主の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた」とある。「ノデ」は「当てもなくさまよう」という意味。そこでカインはその妻を知った。「知った」とは性的な交わりを意味する表現。彼女が産んだ子はエノクと名づけられた。この名は「奉献」「開始」という意味で、カインは両親のアダムとエバと共にしていた生活とは全く異なる生活をこの地で始めるのだと自分自身に言い聞かせたのであろう。そこで彼は自分が建てていた町を自分の子の名にちなんで、エノクという名をつけたのである。カインが町を建てようとしたことは、彼が「地上をさまよい歩くさすらい人となる」(12)という神のことばに逆らおうとする試みでもあったのであろう。

[18-22]「エノクにはイラデが生まれた。イラデにはメフヤエルが生まれ、メフヤエルにはメトシャエルが生まれ、メトシャエルにはレメクが生まれた。レメクはふたりの妻をめぐらした。ひとりの名はアダ、他のひとりの名はツイラであった。アダはヤバルを産んだ。ヤバルは天幕に住む者、家畜を飼う者の先祖となった。その弟の名はユバルであった。彼は立琴と笛を巧みに奏するすべての者の先祖となった。ツイラもまた、トバル・カインを産んだ。彼は青銅と鉄のあらゆる用具の鍛冶屋であった。トバル・カインの妹は、ナアマであった」

ここにはカインの主な子孫の名があげられている。エノク、イラデ(町の人)、メフヤエル(神がいのちを与える)、メトシャエル(神の人)、レメク(征服者)。ここまででカインから6代。アダムからは7代目である。そしてレメクは神が制定された一夫一妻制を無視して、妻をふたりめぐらした。彼は神に公然と反逆したのである。妻のひとりアダの名は「かざり」を意味し、もう一人の妻ツイラは「色合い」を意味すると思われ、ふたりとも魅力的な女性であったようである。アダが産んだヤバル(さすらい人)は天幕に住み、自由に移動し家畜を飼う者の先祖となった。彼は家畜を商業目的で生産し発展させる者となったのである。彼の弟ユバル(音)は営利よりも芸術的なことを好み、立琴(弦楽器)と笛(管楽器)を創作し、それを奏するすべての者の先祖となった。ツイラが産んだトバル・カイン(物を作るカイン)は青銅と鉄のあらゆる用具を作る鍛冶屋となった。彼がこの時代に鉱石から銅、錫、鉄等の金属を精錬し金属製品を製作することができたことは驚きである。ノアの洪水前の人々の文化水準は驚くほど高かったのである。トバル・カインの妹

はナアマ(美しく歌を作る者)であった。彼女は音楽家となったのであろう。これらの名前は誕生の時に与えられたのではなく、後にそれぞれの特徴を示す名として用いられるようになったのであろう。

進化論に立つ人類学者は何十万年という長い年月をかけて、石器時代、青銅器時代、鉄器時代と文化、文明が発展して来たとしているが、すでにアダムと初期の子孫が都市化、農耕、牧畜、商業、芸術、冶金術等の技術を持っていたことを知るのである。

[23-24]「さて、レメクはその妻たちに言った。『アダとツィラよ。私の声を聞け。レメクの妻たちよ。私の言うことに耳を傾けよ。私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた傷のためには、ひとりの若者を殺した。カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍。』」

ここには神への大それた冒瀆が見られる。もはや殺人さえ恐れることのない自己の生存の確信と誇りが見られ、自分がいくらか傷を受けた程度でも相手を生かしておくことはしない。限度内の復讐ではなく、無制限の復讐である。神はカインのために七倍の復讐を約束してその生存を保証された(4:15)が、これに対して、レメクは神によらず自ら七十七倍の復讐を誓うのである。人間の罪のもたらす恐るべき破壊性、増大性がここに見られる。しかし、イエス・キリストはレメクのそれとは対照的なことを命じておられる。→マタイ18:21-22

[25-26]「アダムは、さらに、その妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけて言った。『カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神はもうひとりの子を授けられたから。』セツにもまた男の子が生まれた。彼は、その子をエノシュと名づけた。そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた」

カインの家系の描写の後に、アダムとその子の誕生の記事が突然置かれているのは、人の罪の結果と神のあわれみの働きが対照的に見事に結びついていることを示すためと思われる。セツとは「授ける」「備える」という意味。アベルは死に、カインも去った後に跡継ぎが授けられたことからエバは名づけたのであろう。神の約束(3:15)が、この息子を通して、やがて実現していくとの信仰を彼女は持っていたようである。エノシュは「人」の意味で、セツは人生においてレメクの強さとは対照的に人としての弱さを覚え、深い霊的必要性を感じるようになったと思われ、それゆえ自分の子にエノシュと名づけたと考えられる。そしてこのエノシュの時代に人々は主の御名によって祈ることを始めた。

これはアベルのように犠牲の動物をささげての定期的な礼拝を意味するのであろう。→創世記4:4

人は弱さの自覚の中で、その弱さを顧みてくださるお方としての主の御名によって祈り、礼拝する者とされる。ここにはまだ偶像礼拝の陰は見えない。人類が最初に持った宗教は正しく主の御名によって祈り、礼拝する宗教だったのである。

以後、人は犠牲の動物をささげて神に祈り、礼拝する者となり、これは旧約の歴史を通して継続されていく。しかし、やがて神ご自身が人となってこの世に来られ、犠牲の動物ではなく、自ら十字架にかかれ、死なれ、復活されることによってアダム以来の人間の罪の贖いを成し遂げられる。これが神の御子イエス・キリストによる救いである。そしてこのことはすでに二千年ほど前に実現した。それゆえ、現在は犠牲の動物はささげる必要はないが、イエス・キリストを救い主と信じ、受け入れた信仰者は主の御名によって祈り、定期的な礼拝を行っているのである。この救いはイエスを救い主と信じる者には誰でも与えられる。これが福音である。→ヨハネ3:16